

BUDŌ NEWS

今月のニュース

高松宮記念杯第 33 回全日本銃剣道選手権大会
彬子女王杯第 1 回全日本女子銃剣道選手権大会



彬子女王殿下が里に賜杯を授与する



決勝＝西村（左）が小手を決める

8月8日に高松宮記念杯第33回全日本銃剣道選手権大会が日本武道館で開催され、西村健（静岡）が村上浩隆（北海道）との熱戦を制し、連覇の快挙を達成した。

※詳細は今月のニュース（112ページ）をご覧ください。



高松宮記念杯 第33回全日本銃剣道選手権大会 西村健が連覇の快挙

里麻衣が初代女王に 第1回全日本女子銃剣道選手権大会 彬子女王杯



8月8日に彬子女王杯第1回全日本女子銃剣道選手権大会が日本武道館で開催され、里麻衣（長崎）が森川友紀子（静岡）との激闘を制し、初代女王の座に輝いた。

※詳細は今月のニュース（116ページ）をご覧ください。



決勝＝里（左）が上胴を決める

高松宮記念杯
第33回全日本銃剣道選手権大会

西村健が連覇達成



決勝＝西村（左）が果敢に攻める

高松宮記念杯第33回全日本銃剣道選手権大会が8月8日に、日本武道館で開催された。今大会は全国から65名の選手が参加し、覇を競った。

また、彬子女王殿下のご臨席を賜り、初開催となる全日本女子銃剣道選手権大会が同時開催された。男女同時開催に伴って、選手へのたくさんの応援が会場に響き渡った。

決勝は前回大会優勝の西村健（静岡）が村上浩隆（北海道）との一戦を制し、連覇の偉業を成し遂げた。



試合は3本勝負で、試合時間は各5分で行われた。試合時間内に勝負が決しない場合は、延長戦を勝負が決するまで行うこととした。

■決勝

西村 健 コー 村上浩隆

連覇をかけて決勝の舞台に上がる西村と初の決勝進出を果たした村上の顔合わせ。

試合序盤、両者が技を繰り返しつつ、間合いを探る展開が続く。試合が動いたのは開始2分30秒、西村が村上の小手を捉えて一本を先取する。一本を先取され追いつきたい村



今大会の入賞者＝（前列左から）井下、西村、村上、野田

上は、積極的に前に出て技を仕掛けるも、西村を捉えきれない。そのまま時間が過ぎ、終了直前にお互いの技が交差するも旗は上がりず試合は終了。西村が御山昇氏の3連覇（平成7、8、9年）以来の大会連覇を果たした。同大会の連覇は史上2人目の快挙。



準決勝①＝西村（左）が延長戦の末、上胴を決めて勝利を収めた



準決勝②＝村上（右）が延長戦で上胴を決めて一本勝ち

■準決勝

①西村 健 上上ー下 井下佑也

西村と2度目の出場で初の準決勝進出を果たした井下佑也（鹿児島）の顔合わせ。試合は開始早々に西村が上胴を決めて一本を先取る。その後は両者技を仕掛けるも、決め手を欠く展開が続く。なんとか追いつきたい井下は試合終盤、西村の技の打ち終わりの一瞬の隙を見逃さず、下胴を返して一本を取り追いつく。その後は両者譲らず試合は延長戦にもつれ込む。延長戦開始13秒、西村が鋭く踏み込み上胴を放つと、井下を捉えて一本勝ち。井下は前年選手権覇者に健闘するも惜敗。西村が決勝に進出した。

②村上浩隆 上ー 野田峻祐

村上と今年の全日本銃剣道優勝大会・一般の部で本間道場Aのメンバーとして出場し、優勝を果たした野田峻祐（神奈川県）の一戦。試合は両者ともに間合いを掴めず攻めあぐねる。結局本戦では勝敗つかず、延長戦へ。延長戦でも決め手を欠く展開が続く、延長戦開始3分40秒に村上が上胴を決めて、勝利を収めた。

連覇への挑戦者として

◎優勝Ⅱ西村健（静岡）



思います」

——大会を振り返って

「前回覇者として周りから見られて若干の期待だっただりを感じていました。プレッシャーも多少はあったと思いますが、それを力に変えて戦えたと思います」

——連覇の難しさについて

「プレッシャーを感じるのだと思いますでしたが、次は3連覇を期待されると思うので、そこに向けた「挑戦者」として臨む精神面が重要だと思えます」

——普段の稽古について

「特別な稽古は特にやっていないです。ひたすら地味かもしれませんが、基本を大事にして、応用に発展させることを徹底的にやってきました」

——今後の目標について

「最高の場で連覇をすることができたので、次は3連覇への挑戦者として、また自分の悪いところを見つめ直して、少しでも成長してこの舞台に帰ってこられたらと思います」

——連覇を果たした今の気持ち

「嬉しいの一言ですが、それよりも優勝できたのは家族と、環境をつくってくださった監督、熱心に指導してくださったコーチや、同じ志を持って訓練・稽古をともにしている仲間たちのおかげだと思います」

——決勝を振り返って

「連覇は頭にはありましたが、そういった雑念を捨てて、対戦相手に集中することだけを考えて臨みました」

——決勝の一本について

「素直に出た真っ直ぐな剣だったと思います。自分らしい一本だったと思います」

○入賞者コメント

▽準優勝Ⅱ村上浩隆（北海道）



「（西村選手は）前年のチャンピオンなので、やはり強かったな

というのと、小学生の頃から銃剣道をやっていたので、決勝の舞台で試合ができてよかったです。一本を取られた後は、覚悟を決めて後悔しないように全力で攻めました。優勝しなかったのが悔しいです。今回は小学生の頃から銃剣道を教えてくださったまんねん先生（故田中萬年先生）の写真を道着に入れて一緒に戦いました。先生に感謝の気持ちでいっぱいです」

▽第3位Ⅱ井下佑也（鹿児島）



「自分の持ち味をしつかり出さなかったですが、前年のチャンピオンが相手で、なかなか上手く

試合運びはできませんでした。延長戦まで戦えたのは良かったです。鹿児島県の銃剣道の代表として、攻撃的な銃剣道をみせて、いいところまで上がったのはよかったと思います」

▽第3位Ⅱ野田峻祐（神奈川）



「準決勝の舞台で試合をするのは初めての経験だったので、精

いっぱい頑張りました。前半で勝負をかけて取れば理想でしたが、村上選手も素晴らしい選手ですので、取りきれず延長戦までもつれて負けてしまいました。ここまで勝ち上がれるとは思っていなかったのですが、貴重な経験をさせていただきました。また次回に向けて頑張ります」



【大会結果】

▽優勝Ⅱ西村 健（静岡）

▽準優勝Ⅱ村上浩隆（北海道）

▽第3位Ⅱ井下佑也（鹿児島）

野田峻祐（神奈川）

彬子女王杯

第1回全日本女子銃剣道選手権大会

里麻衣が初代女王



彬子女王杯第1回全日本女子銃剣道選手権大会が8月8日に、日本武道館で開催された。これまで青年銃剣道大会で女子の部はあったものの、女性剣士の最高峰を決める全日本選手権大会はなかったため、今大会が新たに創設された。記念すべき第1回の開催となる今大会には162名の選手が参加し、初代女王の座を争った。また、会場には彬子女王殿下のご臨席を賜った。

決勝は、里麻衣（長崎）と森川友紀子（静岡）が対戦。試合は里が延長戦を制し、見事初代女王の座を獲得した。

■決勝

里 麻衣 コーナー上 森川友紀子
里と森川は、昨年の青年銃剣道大会・女子の部決勝と同じ顔合わせ。試合開始からお互いが積極的に技を繰り出す。試合が動いたのは開始1分40秒、森川が後ろに下がろうとした一瞬の隙を見逃さず、里が小手で一本を先取る。しかし、再開直後に森川が里の上脰を捉えてすぐさま一本を取り返す。その後も両者攻め続けるも試合時間の5分が経ち、延



決勝＝里（左）が小手を決めて一本を先取



今大会の入賞者＝（前列左から）糸原、里、森川、今澤

長戦に突入。開始から両者の激しい攻防と技の応酬が続き、白熱した試合をみせる。勝負が決したのは延長戦開始3分18秒、里がフェイントを3回入れてから上脰を繰り出すと、森川は反応できず、見事な一本が決まった。激闘を制し、里が女子銃剣道選手権大会の歴史に名を刻む初代女王に輝いた。

■準決勝

①里 麻衣 ノー 今澤美紗貴

里と今年の全日本銃剣道優勝大会・女子の部で準優勝を果たした普通科教導連隊所屬・今澤美紗貴（静岡）の一戦。試合序盤から激しい技の応酬が繰り広げられる。その後も両者攻撃の手を緩めず果敢に攻め合うも、ともに一本を取るには至らず延長戦へ。延長戦でも両者の積極的な姿勢が窺える試合展開に。そして延長戦開始約3分のところで、今澤が技を出して空いたのどを里が捉えて一本勝ち。里が決勝の舞台に進んだ。

②森川友紀子 上上ー 糸原心温

森川と前日の全国高校生銃剣道大会・個人戦女子の部で3位入賞を果たした糸原心温（鳥取）の顔合わせ。試合開始20秒、森川が糸原の技のタイミングに合わせて上胴を決め、一本を先取する。その後も森川のペースで試合が進み、開始2分47秒、森川が2本目となる上胴で一本を決めて、試合終了。決勝へと駒を進めた。糸原は高校生ながら初の選手権大会で堂々たる3位入賞を果たした。



準決勝①＝里（右）が延長戦を制するのどを決める



準決勝②＝森川（右）が上胴で一本を決める

歴史に名を刻む優勝

◎優勝Ⅱ里麻衣（長崎）



——優勝した今の気持ち

「最高です」

——決勝を振り返って

「最初一本取った後に取られてその直後に一本取られてしまったので、どういふふうに試合を進めていこうかと考えていました。最後は我慢比べのようでしたが、突けるところを探して突いた一本に旗が上がってよかったです」

——優勝を決めた一本について

「今までのきつい練習であつたり、いろいろなことを乗り越えた上での一本だったと思います」

——大会を振り返って

「第1回ということで、日本一を目指したいという気持ちが強かったので、それに向けて日々練習してきた成果を日本武道館で出せてよかったです」

——女子銃剣道選手権大会について

「第1回大会に自分の名を残したいという想いがありました。青年銃剣道大会とはまた違ったルールで、初代のチャンピオンになりたいと思つていたので、嬉しいですよ」

——普段の稽古について

「まず、常に試合をイメージした突きを心掛けて練習しました。練習でできないことは試合でもできないと思いますし、試合で使える剣を常に意識して練習に取り組んでいました」

——今後の目標について

「連覇をできたらいいなと思つてます。ただ難しいことなのはわかつていますので、限られた時間の中で練習を積み重ねていけたらと思います」

○入賞者コメント

▽準優勝Ⅱ森川友紀子（静岡）



「里選手はやっぱり強かったです。昨年の青年銃剣道大会の決勝でも負けていたので、それを挽回できるようにと戦いました。相手にも負けましたし、自分にも負けていたと思います」

▽第3位Ⅱ今澤美紗貴（静岡）



「日本武道館でたくさんの人に见られている中で、自分の力を出すことの難しさを感じました。長い時間試合していく中で、一本を取り切れることは練習ではできていたのですが、試合では出し切れていなかったと感じました」

▽第3位Ⅱ糸原心温（鳥取）



「森川さんは本当に私が憧れている選手で、この第1回大会の準決勝で試合をすることができて嬉しい気持ちです。今日の準決勝は、この大きな舞台で一流の選手と戦わ

せてもらうなかで、自分の今の実力を出し切れたと思います」

○大会講評

▽番匠幸一郎全日本銃剣道連盟会長



「男子の選手権大会は33年の歴史がありますが、女子の選手権大会を創設することで選手の皆さんの励みや目指すべき大会になったのではないかと思います。特に今回は彬子女王殿下にお成りいただきまして、直接記念杯を御下賜いただきました。また銃剣道の重要性とこれからについて励ましの御言葉をいただき、銃剣道関係者にとって歴史的な一日になったと思います」

【大会結果】

▽優勝Ⅱ里 麻衣（長崎）

▽準優勝Ⅱ森川友紀子（静岡）

▽第3位Ⅱ今澤美紗貴（静岡）

糸原心温（鳥取）

和道会 インターナショナルカップ 2025 10年ぶりの大会に 29カ国が参加

和道会インターナショナルカップ2025（主催）全日本空手道連盟和道会）が8月16・17日に日本武道館で開催された。今回は10年ぶりの開催となり、29カ国から約290名の選手を迎え、組手と形の計24種目で熱戦が繰り上げられた。

組手では、日本勢が団体戦も含め計15個の金メダルを獲得した。

形では、全種目で日本選手が優勝を収め、計8個の金メダルを獲得した。

開会式に先立ち、東京都足立区を中心に活動をしている和太鼓チームの西盛太鼓が和太鼓の演奏を披露し、大会を彩った。演奏が終わると会場から大きな拍手が送られた。





開会式に先立ち、西盛太鼓による和太鼓の演奏が披露された



開会式で選手宣誓をする松村亜来選手（左）・岡本小鉄選手





男子団体組手・決勝中堅戦＝吉村選手（左）が上段突きで1ポイントを先取



男子団体組手で優勝を決めて喜びをみせる日本チーム



男子団体組手の決勝後、互いに健闘を称（たた）え合った

組手

▽一般男子個人戦（全5階級）

日本選手の優勝は、60 kg級・政岡大雅、67 kg級・荒川雅俊、75 kg級・中村絢彩、84 kg級・豊田陽也の4階級。

▽男子団体戦（10チーム出場）

日本は準決勝でスコットランドと対戦し、苦戦を強いられたが、3―2で決勝へ駒を進めた。

決勝には、日本とドイツが勝ち上がった。

先鋒戦は、一般男子84 kg級で優勝した豊田陽也（日本）とティアバツハ・ルカ（ドイツ）の対戦。試合開始からおよそ50秒、豊田が中段蹴りを決めて先取。豊田の勢いは止まらず、8―0で完勝した。

続く次鋒戦では、試合終盤に試合が動き、下村彪馬（日本）は上段突きなどを決めて4―2で勝利を収めた。

中堅戦は、吉村郁哉（日本）とドイチュ・パスカル（ドイツ）の顔合わせ。試合序盤はお互いの間合いをはかる展開となったが、中盤以降の両者は終始攻め続け、4―2で吉村

好評発売中！

空手は沖縄で発祥し、日本本土に伝承され、世界のKARATEとなった。
その歴史と技法を、共同執筆で紐解く。空手の真髄に迫る白眉の一冊。

空手道

その歴史と技法

小山 正辰 和田 光二 嘉手苅 徹 著



四六判・上製・568頁・定価2,640円

◎ ご注文・お問い合わせ ◎

(公財)日本武道館 月刊「武道」編集部
〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2-3
TEL 03-3216-5147 FAX 03-3216-5158
<https://www.nipponbudokan.or.jp>



一般男子組手 84kg級・決勝＝豊田選手（右）が上段突きを決める



一般男子組手 67kg級・決勝＝
優勝した荒川選手（右）と平田奨英選手が労（ねぎら）い合う



一般男子組手 60kg級・決勝＝政岡選手（左）が上段突きを決める



一般女子形・決勝＝小林選手のチントウ



女子団体組手・決勝先鋒戦＝松村選手（右）が上段突きを決めた



女子団体組手の優勝を喜ぶ日本チーム



一般女子組手 61kg級・決勝＝松村選手（右）と本田選手

が勝利した。日本が3連勝して勝ち越し、副将、大將戦を残してドイツに勝利した。

▽一般女子個人戦（全5階級）
日本選手（50kg級・松田葵、55kg級・武川裕奈、61kg級・松村亜来、68kg級・伊藤希咲、68kg超級・安達水優）が全階級で優勝を果たした。また、4階級で日本選手同士の決勝となり、日本の選手層の厚さを感じさせた。

▽女子団体戦（9チーム出場）
決勝は、日本とイングランドの対戦。先鋒戦、61kg級優勝の松村亜来

形

（日本）とクロウフオード・ロウレン（イングランド）の戦いは、試合後半に松村が上段突きを決めて、1ポイントを守り抜き勝利。

次鋒戦、61kg級準優勝の本田実夢（日本）が試合中盤にエティエンヌ・キアラ（イングランド）に試合の均衡を破る上段突きを決めて先取。本田はその後も攻め続け6―0で完勝。日本は2連勝し、大將戦を待たずに優勝を飾った。

▽一般男子（44名出場）

決勝は菊池奏泰と藤井健留の日本選手同士の対決となり、両者とも真半身猫足立ち手刀受けが特徴といえるクーシヤンクーを演武した。5名の審判による旗判定の結果、5―0で菊池の勝利となった。

▽一般女子（30名出場）

一般男子と同じく、小林美南海と橋本怜奈の日本選手同士の決勝となった。先に橋本がクーシヤンクーを、対する小林は「緩急」「力の強弱」「重心の安定」が要求されるチントウを演武。小林が3―2の接戦を制し、優勝を飾った。



日本選手団

◎村瀬一三生・日本選手団代表

インタビュー

「選手たちには『礼』と『節』を守って、変なパフォーマンスをしないで、相手を尊敬しながら試合をするよう伝えてきました。最後まで勝つて負けても、堂々とやってくれました。トラディショナル(伝統的な)空手ということを念頭に置いて、強い弱いだけでなく、武道の心を大切に、社会人になっても生きていくような心持ちでやりなさいと、常日頃から指導をしています。和道会は若手の伸び盛りの選手が多く、ミ二国体でチャンピオンを出して、今から3、4年後が楽しみです。(今後の展望として)第二、第三の世界チャンピオンを和道会から輩出したいと思っています。今日はその第一歩になったと思います」



【大会成績】優勝者・チームのみ
◎組手

- | | |
|----------------------------------|-----------------|
| ▼男子団体Ⅱ日本 | ▼女子団体Ⅱ日本 |
| ▼一般男子60kg級Ⅱ政岡大雅 | ▼一般男子67kg級Ⅱ荒川雅俊 |
| ▼一般男子75kg級Ⅱ中村緋彩 | ▼一般男子84kg級Ⅱ豊田陽也 |
| ▼一般男子84kg超級Ⅱアンダーソン・グレッグ(スコットランド) | |
| ▼一般女子50kg級Ⅱ松田葵 | |
| ▼一般女子55kg級Ⅱ武川裕奈 | |
| ▼一般女子61kg級Ⅱ松村亜来 | |
| ▼一般女子68kg級Ⅱ伊藤希咲 | |
| ▼一般女子68kg超級Ⅱ安達水優 | |
| ▼ジュニア男子Ⅱ飯島楓斗 | |
| ▼ジュニア女子Ⅱ江村夏萌 | |
| ▼カデット男子Ⅱ中村心 | |
| ▼カデット女子Ⅱ西村まりあ | |
| ◎形 | |
| ▼一般男子Ⅱ菊池奏榮 | |
| ▼一般女子Ⅱ小林美南海 | |
| ▼ジュニア男子Ⅱ行司光希 | |
| ▼ジュニア女子Ⅱ後藤唯衣 | |
| ▼カデット男子Ⅱ富澤星 | |
| ▼カデット女子Ⅱ加納莉愛 | |
| ▼マスターズ男子Ⅱ竹本幸司 | |
| ▼マスターズ女子Ⅱ荒島絢香 | |



日本選手団主将・岡本選手を胴上げ

日本武道学会第58回大会

基調講演・シンポジウム

新たな時空での武道を考える

「eスポーツ、オンライン稽古・指導」



本部企画シンポジウム「武道稽古の多様性：オンライン稽古・指導における身体性を考える」で発表を行う新井良剣道スウェーデン代表男子監督（右端）



招待講演「南極観測隊という極限環境におけるメンタルレジリエンスとリーダーシップ」
澤柿教伸法政大学副学長



基調講演「eスポーツ科学～自他共栄を具現化する『e武道』の創成を目指して」
松井崇筑波大学准教授（右端）

日本武道学会第58回大会が8月30・31日、法政大学多摩キャンパス（東京都町田市）で開催された。大会では2日間を通して日本武道学会会員による一般研究発表が行われ、人文・社会科学系、武道指導法系、自然科学系、ポスター発表の4会場に分かれて研究の成果が発表された。

また、1日目には招待講演、基調講演、本部企画シンポジウムが行われ、基調講演では「eスポーツ科学」、シンポジウムでは「オンライン稽古・指導」といった視点を通じたデジタル空間での武道のあり方について活発な議論が行われた。

両日ともに午前中は一般研究発表が行われ、今大会は70演題が発表された（演題一覧は128～129ページ）。発表者には発表と質疑応答のための時間が合わせて15分間与えられ、発表者は自身の研究成果をパワーポイントやレジュメを用いて発表した。質疑応答では多くの質問が発表者に投げかけられ、議論が交わされた。



1日目の午後には、招待講演、基調講演、本部企画シンポジウムが行われ、各会場で研究発表を行った会員たちが一堂に会した。

はじめに今大会会場である法政大学の澤柿教伸副学長による招待講演が行われた。南極地域観測隊に4度参加し越冬隊長の経験を持つ澤柿氏は、「南極のような極限の環境下に

おいては、『Integrity（真摯^{しんしん}）』を用いた確かな理論に基づく隊員ケアと、『Intimacy（親密^{しんみつ}）』を用いた現場の実態に基づく隊員ケアを融合させてチームをまとめることが大切である」と説明し、武道指導に活用できる可能性を示した。

続いて行われた基調講演では松井崇筑波大学准教授が講師となり、eスポーツ科学を手がかりとした「e武道」の創生について講演を行った。松井氏は近代柔道の祖・嘉納治五郎の言葉を用い、これまで武道の身体活動によって培われると考えられてきた「自他共栄」の教えを、身体活動を伴わないeスポーツでも育むことは可能かという問いを参加者に投げかけた。そして松井氏は、武道の稽古における身体接触が人間の



一般研究発表の様子



本部企画シンポジウム発表者。左から新井氏、久保田氏、荒川氏



なぎなたの専門分科会では
武道具の修理、手入れの体験が行われた



令和7年度優秀論文賞を受賞した中道泰宏氏（左）と
筒井雄大氏（右）。中央は大保木輝雄日本武道学会会長

社会性を育むことができるように、eスポーツを通じた心理的な交流でも社会性を育むことができるという可能性を示し、「e武道」による体力水準によらないインクルーシブな「自他共栄」の具現化に言及した。

本部企画シンポジウムは「武道の多様性・オンライン稽古・指導における身体性を考える」をテーマとし、新井良氏（剣道・スウェーデン代表男子監督）、久保田浩史氏（柔道・東京学芸大学准教授）、荒川尊祐氏（空手道・国際武道大学准教授）の3名が発表者として武道のオンライン稽古の実態や展望について発表した。2020年以降のコロナ禍の影響で発展した武道のオンライン稽古に関して、遠方の人々と稽古を共にできることやアーカイブに残して反復稽古することで技術向上につながるなどのメリットと、映像で見る技術と現場で見る技術にイメージの差があることや武道の身体感覚が映像で伝わりにくいことなどのデメリットが述べられた。全体でのディスカッションでは、基調講演講師の松井氏も交えた忌憚（きたん）のない意見の交換が行われ、時間いっぱいまで質

問が途切れることはなかった。



2日目の午後は、はじめに令和7年度優秀論文賞の表彰が行われ、受賞者の中道泰宏氏（立教新座中学校・高等学校教諭）と筒井雄大氏（国際武道大学助教）が大保木輝雄日本武道学会会長から表彰状を受け取った。その後、令和7年度日本武道学会総会が行われ、大保木会長が第58回大会の総評として「若い研究者を含めて、さまざまな方法で研究を深めている姿を見てとても感動した。これからも日本の武道を国内および世界に向けて発信し続けてほしい」と述べた。

総会の後は専門分科会が開かれ、た。弓道、空手道、少林寺拳法、なぎなた、障害者武道の五つの会場に分かれ、各武道ごとに講演・企画が行われた。



	演題	発表者	所属
自然科学系	投の形動作を対象とした骨格検出精度の評価	横山 喬之	摂南大学
	柔道初級者と経験者における頭部衝撃曝露の探索的検討：“投げられる機会”の違いに着目して	越田専太郎	SBC 東京医療大学
	高機能的衝撃低減性能を有する面防具の試作と評価	濱西 伸治	東北学院大学
	日本剣道形における視線と脳活動に関する研究	中島 有健	東海大学
	文献検索による研究の発想と独創性の検討	橋爪 和夫	アール医療専門職大学
	投げ込みを用いたタバタ式トレーニングにおけるトレーニング法の探索	長谷 晃希	中京大学
	内股の跳ね上げにおける運動連鎖のバイオメカニクス的研究	池田 希	いけだ接骨院
	重心動揺から見る柔道経験者の姿勢制御の特徴について	曾我部晋哉	甲南大学
	弓道における「離れ」局面での上肢関節角度と狙い・射出角度の関係	原田 隆次	国際武道大学
	個人競技の選手が集団で練習する意義について―空手道を題材として―	花田 光	国士舘大学大学院
	口呼吸改善を目的とした鼻呼吸訓練の効果―空手道選手を対象として―	鈴木 浩司	日本大学松戸歯学部
武道指導法系	生成 AI を用いた中学校剣道授業の動向分析― 2017 年以降の指導法に着目して―	加藤 純一	皇學館大学
	高校生の武道授業への関心低下の要因分析―体育授業との比較から―	杉田 菜摘	大阪教育大学大学院
	障害者への剣道指導を通して見える指導の可能性 ～競争社会から共創社会へ～ その 8 注意力的変化に焦点を当てて	三苫 保久	滋賀県立大津清陵高等学校
	空手組手競技における指導者と競技者の作戦意識の関係	大徳 紘也	日本体育大学
	異なる素振り動作が剣道初心者の打突動作に及ぼす影響	椿 武	神戸親和大学
	中学校柔道授業における「柔道演武」の実践	川染 拓海	大阪教育大学
ポスター発表	柔道ゴールデンスコアの戦略に関する調査 その 1 ― GS を意識する時間帯と狙うポイント―	越野 忠則	国際武道大学
	柔道ゴールデンスコアの戦略に関する調査 その 2 ― GS 時の戦術と組手の意識について―	中矢 力	東海大学
	柔道競技の組手の攻防における攻撃代替技能の練習法の検討	高野 綺海	東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科
	中央と地方における旧制高校剣道部の活動状況	佐藤 皓也	新潟医療福祉大学
	原馬室獅子舞棒術に伝承される武術的要素（第一報）	渡邊 峰雄	日本薬科大学
	計量テキスト分析を活用した武芸伝書分析の試み	太田 順康	大阪教育大学
	『紀効新書』の武術記述分析―威継光の武術観を探る―	劉 暢	国際武道大学
	大学柔道選手が指導者から受ける非言語的行動の印象と頻度に関する調査 (その 3)	熊代 佑輔	国際武道大学
	跳込み流し突きの創出についての考察	江川 玖成	東京学芸大学
	柔道競技を始める契機に関する研究	塚田 真希	東海大学
	柔道授業におけるフィードバックの認知が学習成果およびスポーツ参加に 及ぼす影響	山本 浩二	関西福祉大学
	柔道授業が柔道整復術ノンテクニカル（精神面）に及ぼす影響（第 2 報） ―養成学校生に対する認識調査を基にして―	福井悠紀子	環太平洋大学
	柔道競技における国内大会と国際大会の技術特性：2022 ～ 2024 年の講道 館杯と世界選手権の比較	三宅 恵介	中京大学
	武道としての「競技かるた」の起源と今日 ―遊びや競技の「楽しさ」に着目して―	清野 宏樹	桃山学院大学人間教育学部
	近代剣道歌の時代的特徴―計量テキスト分析に基づく考察―	小林 勝法	文教大学
	日本剣道形実施時の視線行動は熟練度に関係するのか？	高橋健太郎	関東学院大学理工学部
	運動有能感の向上を活用した剣道授業の開発	嵩田 瑞希	大阪教育大学教職大学院
	剣道スコアの分析に基づく年代・ポジションと試合内容の関連	池田 孝博	福岡県立大学 ／鹿屋体育大学連携大学院
	剣道の竹刀形状が正面打撃時の速度に及ぼす影響	山口 幸一	関西福祉大学
	空手道競技における外傷発生率に関する考察	元野 紘平	神戸大学整形外科

【一般研究発表 演題一覧】

	演題	発表者	所属
人文・社会科学系	柔道の旗判定の意義に関する研究：柔道経験の有無と曖昧さ耐性	成田 泰崇	国士舘大学
	全日本柔道連盟による「月経による出血が柔道衣に付着していることが目視できた場合の対応方針」発出の経緯	稲川 郁子	日本体育大学
	コロナ禍における鰐鰯り合いの厳格化が国際レベルの剣道試合に与えた影響	二ツ森飛鳥	法政大学大学院 スポーツ健康学研究科
	フランス柔道連盟の柔道普及について	瀧本 誠	駒澤大学
	ドイツにおけるライフステージに応じた生涯スポーツとしての柔道の取り組み：ドイツ柔道連盟の級段位規定及び指導者養成に関するガイドラインの分析を中心に	Maja Sori Doval	津田塾大学
	地方議会における武道に関する議論	田中 宏和	高崎経済大学
	柔道場経営に関する一考察	中村 和裕	福山大学
	運動部活動地域移行に向けた剣道町道場の役割と課題	北村 尚浩	鹿屋体育大学
	伝統少林拳の継承状況－現地調査による実証研究	川島 直央	北京体育大学
	ガッツポーズの是非を巡る「問いの構造」の再定位：柔道における勝者と敗者の両柄についての倫理的考察	佐藤 雄哉	国士舘大学
	日本柔道における「強さ」概念の考察：強いとはどういうことか	竹市 大祐	国士舘大学大学院
	多様な子どもを指導する柔道クラブ指導者が感じる困難さと成長に関する調査研究	川戸 湧也	三重大学
	剣道における人間形成に関する一考察	松本 秀夫	東海大学
	自己省察プログラムによる学業および競技者アイデンティティの変容	秋山 大輔	九州産業大学
	戦前の学校武道法制に関する新事実 －1919～31年の高等学校・中等学校における体操科の剣道・柔道－	坂上 康博	元一橋大学
	日本文化としての柔道－オリンピックの柔道採用をめぐる嘉納治五郎の思想－	永木 耕介	法政大学
	ライフヒストリーからみる戦後武道史：島根県の講武館関係者への聞き取り調査	中嶋 哲也	茨城大学
	デジタルアーカイブを活用した武道史研究の可能性と展望：「邦字新聞デジタル・コレクション」からみる武道史再考	矢野 裕介	愛知淑徳大学
	リバイバル剣道実践者のライフスタイルに関する研究 －高齢・高段位者に着目して－	井上 涼	東海大学大学院
	居敷の可能性について ～新陰流と制剛流との関係から～	佐竹 彬	石田・佐竹稽古塾
	後期水戸学における「文武」に関する研究－藤田幽谷に着目して－	鈴木 謙心	筑波大学大学院
	新当流伝書にみられるわざに関する比喩表現についての一考察 －『兵法自観照』を中心に－	軽米 克尊	天理大学体育学部
	弓と鍼～日置流弓目録「当拳の事」について～	三保 翔平	仙台赤門医療専門学校
	ハワイの超禅寺弓道の概念と歴史に関する一考察	INOUE Makoto Reed	国際武道大学 武道・スポーツ研究科
	日置流雪荷派弓術家太田雪應について	松尾 牧則	筑波大学
	【古流柔術】竹内三統流と本覚克己流の比較 －類似する型・技法の存在について－	河野 敏博	新風館武藝研究所
	琉球王朝時代の武技（唐手・那覇手）の源流探求	早坂 義文	古武道研究会
	棚倉藩 伊原勝司の槍術修行について	森本 邦生	貫汪館
	松浦静山の剣術論に関する一考察：易の思想との関連に着目して	堀川 峻	環太平洋大学
	幕末期の武芸観と武芸教育に関する研究	大澤 誠	皇學館大学大学院 文学研究科
	夕雲流剣術に関する研究－真理谷円四郎の剣術論に着目して－	柴田 直生	筑波大学大学院
自然科学系	活動後増強が柔道選手の握力に与える影響	佐々木健志	順天堂大学大学院 スポーツ健康科学研究科
	一流競技者の背負投：上肢の運動パターン分析	石井 孝法	NPO スポーツコーチングアカ デミア